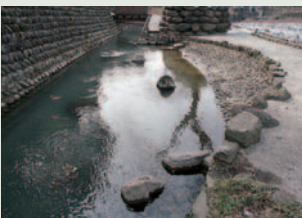


木曽川文庫

# KISSO



木曽川文庫は治水の資料館。  
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、  
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。  
春号は、奥美濃の城下町、八幡町から歴史的水利用システムを中心に。  
また、平成7年に発見された金廻四間門樋を  
今回から2回にわたって特集します。

## INDEX.....

### ふるさとの街・探訪記《八幡町》

◆長良川の清流に育まれた奥美濃の小京都

### AREA REPORT

◆未来へつなぐ、八幡町の歴史的水利用システム

### 気ままにJOURNEY

◆端正な表情を浮かべる城下町は、爛漫の春景色

### 歴史ドキュメント

◆揖斐川左岸堤防で発見された産業遺跡

### TALK&TALK

◆高須輪中の成立から金廻四間門樋築造まで

### 民話の小箱

◆竜の怒りで大洪水

建設省中部地方建設局  
木曽川下流工事事務所



# 長良川の清流に育まれた 奥美濃の小京都

八幡町は、水とおどりの城下町。美濃と飛騨を結ぶ交通の要所であることから、昔から、多くの巨戦が繰り広げられ、八幡城をはじめ、いくつもの支城が築かれました。この八幡城は郡上の政治・経済・文化の中核。今でもその風情をあちこちに残しています。現在は、多彩なプロジェクトを計画し、将来の発展をめざしています。



郡上八幡をのぞむ

## 清流が走る水の里



い地を求めて移動したのでしょう。発見される遺跡はきわめて少なく、わずかに塚前遺跡を残すのみとなっています。古墳は終末期の小円墳が長良川が吉田川などの支流と合流する地点で発見されています。このような場所は、当時、交通や軍事の重要なところとして、それに関わる役目をもった豪族が住み、地域を治めていたと考えられます。

## 敬虔な祈りを捧げた山岳信仰

平安期の斉衡二年（八五五）、郡上郡は武儀郡から独立しています。この郡名は、武儀郡の川上の部分の開発を表現しているようです。奥美濃地方に属する郡上郡一帯は、山高く水清しところ。噴火を繰り返す山や高く険しい山に対して、霊や神が宿ると信じ、畏れ敬ってきました。

奈良時代の頃、大陸から山岳宗教が伝わり、白山は人々の信仰の対象となり、美濃からも白山へも道が開かれました。八幡町にも白山神社が四社創建されました。一方、郡上郡南部の高賀山や瓢ヶ岳を中心とした山岳信仰も生まれました。この地域一帯には、高賀山の鬼退治の伝説が残っています。高賀山の鬼が麓の村々に危害を加えるので、朝廷の命により藤原高光が虎虎彦彦に祈願し数年かけて討伐。麓の六ヶ所に神社・仏堂を建立し、子孫を残したとされています。これら六社は虚空の像信仰の拠点となり、六社めぐりが行なわれるようになりました。

## 歌道に優れた名門東一族

鎌倉幕府成立後、この地は以前から豪族として力をもっていた鷲見氏、坂東・千葉忠の名門千葉氏の流れを汲む東氏による並立支配が続きました。郡上郡の中世領主で周知の人物は、東常縁。東氏は代々武家の歌人として有名で、常縁は室町將軍足利義尚の和歌の師を務めるなど、歌道に優れた業績を残しました。東氏は土地を守るため、篠脇城・郡上郡大和町やいくつもの支城を築き、戦いに備えていました。この東氏は常縁の室町中期においても坂東とのつながりが深く、千葉氏の内戦に加わり一〇年房総地方に滞在、この間、本拠地篠脇城は美濃の守護代斎藤妙椿に一時奪われています。

下剋上の戦国時代になると、郡上でも東氏、遠藤氏、稲葉氏らが郡上の領地をめぐる争いがありました。東氏の時代には、郡上へ侵入する越前の朝倉氏を退けましたが、この頃から、東氏の一族であった遠藤氏が次第に力をつけ、東氏と東殿山での決戦が始まりました。両軍は吉田川をはさんで激しい攻防を続けましたが、一〇日間の戦いの結果、東氏は敗走、こうして三四〇年にわたる東氏の時代は終わりを告げました。

## 八幡城を改修した稲葉貞道

東氏を討伐した遠藤氏はだちに八幡城を構えました。城下を眼下に見下ろす城は南の吉田川、西の小駄良川を自然の壕とした要害。徐々に勢力を伸ばした遠藤氏は、三人の戦国武将、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康とともに戦いを繰り返しました。しかし、本能寺の変後は、岐阜の織田信孝に倣い、立花山城（美濃市）にて、より羽柴秀吉に抗戦。それが原



高賀六社の1つ那比新宮神社





八幡城から東氏の居城があった東殿山を望む

因で減封の上、加茂郡へ左遷され八幡城には、勇将稲葉一鉄の子、貞道が入城しました。貞道の大事業は、八幡城の改修でした。山上に本丸を設けて山城としての偉容を整えるとともに、山腹の平地を広げて二の丸とし、日常の居館を設けました。そして北東側には新しく濠を掘って備えとし、山城の要害を生かしながら、平城としての機能を備えたのでした。これが以後の八幡城の基本的構造となりました。

## 郡上藩の成立と城下町の整備

慶長五年（一六〇〇）、天下分け目の関ヶ原の合戦では、稲葉貞道は西軍に、遠藤慶隆は東軍に参戦し、遠藤氏は姻戚の飛騨の金森可重とともに八幡城を攻撃しました。ところが西軍に参戦していた稲葉氏もこの時点で、東軍に転向しており、奇妙な内戦となりました。結局和議となり、郡上郡一帯は再び遠藤氏に封じられ、ここに遠藤氏による郡上藩が成立しました。

遠藤氏の功績は、城下町の整備です。関ヶ原の合戦後、郡上城主に復活した遠藤慶隆は三〇四年かけて八幡城を改修し、城下町へ入る街道には番所や枡形を配備しました。

承応元年（一六

五）城下横町の大火を契機として、遠藤常友は城下町を改造。要所に寺を配置し、職人町や鍛冶屋町などの町を整えるとともに、柳町用



鍛冶屋町と職人町

水・鳥合用水を開き、現在に至る利水設備の基盤を整備しました。

## 郡上の産業

山が多く、耕地の少ない郡上では少しでも収穫を上げようと歴代の城主は新田開発を奨励しました。また、養蚕が盛んに行なわれ、良質の繭を生産する専業農家が増えていきまし

た。郡上郡や武儀郡でとれる生糸は、賈代糸と呼ばれ、京都や大阪に送られるようになり、山地や原野が多い郡上地方では、馬の飼育にも適していたため、中世の頃より多くの馬が飼育され、数々の名馬を出すなど、馬の産地としても知られるようになりました。もちろん農耕用にも多く飼育され、山地での農作業の大きな力となっています。

毛付市は、領主が馬を徴発するために毎年夏に城下で開いた馬市のことです。領内の農民が飼っている馬を集め、良い馬については領主が高価な値段で買いあげました。この日は、領内外から集まる農民たちで、町はにぎわいをみせました。

## 農民が勝利した郡上一揆

江戸時代前期の郡上藩は、遠藤氏の支配に始まり、井上氏、金森氏、青山氏と変遷しています。金森氏は著名な豊臣大名で、飛騨の名君と呼ばれた一族でした。元禄五年（一六九二）に滅封されて出羽国に移され、その五年後には再び転封されて、郡上藩の領主となりました。この二度にわたる転封と、江戸屋敷の2度の大火が、郡上藩の財政を逼迫させる原因に。それに加え、金森頼錦が幕府の奏者役となり將軍の側近として仕えるようになると、参勤交代で費用が苦しい上に、藩主の交際が広くなり、出費は増えるばかりとなりました。

この財政難に対応して藩主は増税しましたが、焼け石に水。そこで、年貢の徴収方法を従来の定免取から検見取に変更しました。前者は、数年間の収穫量を平均して毎年同じ年貢を課する方法で、後者は、定められた田の一定

の収穫高を図る、という坪刈りを基準に毎年年貢を決める方法です。この検見取は全国的にも特異な例ではありませんでした。しかし、ただでさえ収穫高が低い山村の上、寛永一九年（一六四二）の飢饉にあえぐ郡上一帯では、徴収法の変更は、生活そのものを脅かす増税に結果することは目に見えていました。

宝暦四年（一七五四）、検見取に反対して宝暦郡上一揆は勃発。農民たちは八幡町の南宮神社の神前で傘連判状をつくって団結を固め、八月一〇日には千人余が城下に押しかけて強訴が始まりました。この段階で、庄屋層はいつたん検見取を承知してしまつたことから、一揆は本格化。江戸への越訴と藩当局への強訴の両面を闘われました。しかし、多数の年牢と懐柔によつて脱藩者も続出。次第に一揆を扇動する立百姓と反対派の寝百姓に色濃く分かれていきました。

宝暦八年四月（一七五八）、立百姓の代表は江戸の目安箱に箱訴。七月には老中酒井忠奇から裁判の命令がくだされました。藩主金森頼錦らの詮議は二月にも及び、一月には改易の判決がくだされ、関係者の処罰はそれにとどまらず、幕府の勘定奉行をはじめわめて広範囲にわたりました。農民側の処罰者も死罪二名のほか、遠島、追放など多数。多くの犠牲を払いながらも郡上一揆は立百姓側の実質的勝利に終わりました。

有名な郡上八幡踊りには「郡上八幡でいくときは、雨も降らぬに袖しぼる」の一節がありますが、これは幕府の審問に出発する農民の別れを惜しんだものです。

## 不撓不屈の凌霜精神

慶応四年（一八六八）、郡上藩の家老は江戸無血開城に応じることなく、凌霜隊を結成。会津若松籠城軍に加わり防戦しました。しかし落城に伴い八幡へ護送され、明治三年（一八七二）まで入牢。藩命により戦つたにも関わらず、解放後も周囲の目は冷たく、隊員のほとんどは郡上を離れていきました。この凌霜隊の名は、郡上藩主青山氏の紋章葉菊にちなん

だもの。葉菊は霜をも凌ぐことから不撓不屈の精神を表したといわれています。

凌霜精神はその後も受継がれ、昭和二年凌霜塾を結成。当時の国策として満州へ移住した郡上村開拓団でもその精神は生き続けました。この「凌霜」は現在の郡上八幡高校の校訓となっており、八幡城や会津の飯盛山に凌霜隊の顕彰碑も建てられています。

## 官民上げの町おこし

凌霜隊の争乱が終結した後、郡上町が成立。明治五年には郡上役所が八幡町に置かれ、近代になつても、八幡町はやはり郡上の中心です。町に近代をもたらした第一の画期は、八幡水力電気会社設立でした。これは県内水力電気事業の最初で、二姫滝の落差を利用したものでした。

昭和四年には国鉄越美線が八幡に開通、昭和二年には、六ヶ村が合併して八幡町が誕生。富山に抜ける国道一五六号が整備されると、交通アクセスも便利になりました。こうした交通網の整備は、山村である郡上一帯の長年の願い。平成八年には東海北陸自動車郡上八幡ICも整備され、太平洋と日本海を結ぶ観光道路として、大きな期待を担っています。



八幡水力電気会社の発電所

## 参考文献

- 『郡上八幡町史』
- 『上下巻八幡町昭和三六年発行』
- 『ふるさとをゆく』
- 『郡上郡教育振興会一九九九年発行』
- 『町勢要覧一九九五』八幡町
- 『郡上八幡の本』
- 『はる書房一九九二年発行』
- 『岐阜県地名大事典』角川書店



# 未来へつなぐ 八幡町の歴史的 水利利用システム



春の吉田川

周囲を山に囲まれた八幡町は、四百年の歴史をもつ城下町。町なかには縦横に走る水路網や、長良川、吉田川、小駄良川の美しい清流、八幡町は江戸初期から、この豊かな水の恵みを多面的に利用、厳しいルールと暮らしの智慧で、美しい水環境を守り続けてきました。その歴史的な水利利用のシステムを未来へ、八幡町では行政、地域が総力を上げて取り組んでいます。

## 多面的な水利利用システム

周囲に山々が連なる八幡町の九三％は山林です。年間降雨量は、三千八百㎜。高温多湿な気象条件に加え、大規模な鍾乳洞が数多くあることが示すように山々は大量の石灰岩を含んでいるため、保水能力に富み、地域全体がミネラルウォーターの製造工場。豊富な湧水や冷泉がいたるところで湧出しています。

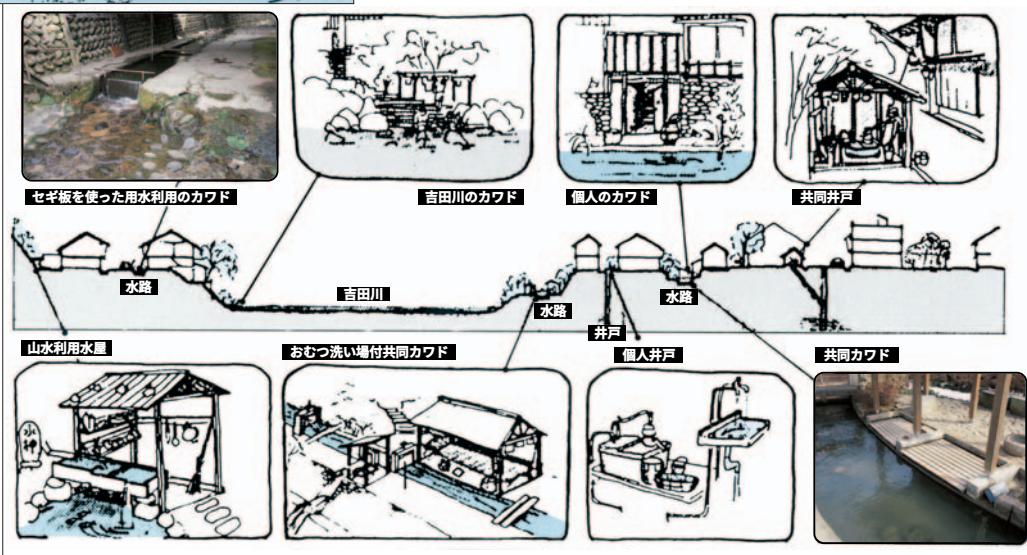
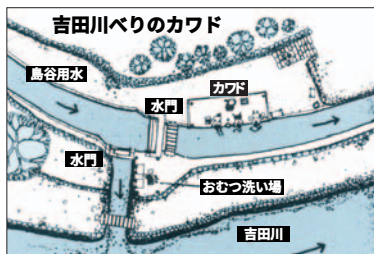
この恵まれた水資源を有効に利用し、水路整備をしたのが、江戸初期の藩主遠藤常友です。大火災をきっかけに城下町を改造して、柳田用水・島谷用水を開き、さらにその水を分水する小水路を町中によりめぐらせて、水を核とする多面的な水利利用システムを構築しました。八幡の町の音の風物詩は、「コロコロ」という水の音。これは水路を流れ落ちる音で、城下町の風情に彩りを添えています。

## 水循環システムで水を再利用

この町に住む人々は、水の恩恵を受けるため、さまざまな工夫をしています。谷川や沢川の水は、水門によって町の中に導入しています。各家庭ではセギと呼ばれる木製の堰板を立てて、用水路の水位を上げ、水を側溝に導き、その水を各自の家屋の中に引き入れて利用するシステムになっています。

利用済みの水は再び用水路に戻されて、町並みの空間に潤いを与えながら流れ、その後は水田などの農業用水に使われて、再び、水路や河川に戻るといった水循環系（クロズドシステム）を人工

水利利用形態（昔から利用されている生活用水のいろいろ）



的に組込んでいます。この水利利用形態は、古来からの智慧と体験が集積されたもので、毎日の生活のなかで活用されています。

## 水場の「しずみ」

清らかな水を守るため、その利用には昔から厳しいルールが守られてきました。カワド（共同の水場）では、飲み水・野菜洗い・食器洗いなど、洗うものの順序や時間帯が決められており、用水路ごとに清掃当番を置き、責任をもって水管理にあたる習慣が現在まで受け継がれています。

このカワドは町の交流空間。春には雪どけ水が流れ、夏場には水音が涼感を呼ぶ親水空間でもあります。道の両側を流れる水路は、子どもの遊び場となり、その元気な姿をながめながら母親は、カワドで洗う物に余念がありません。

この満ち足りた空間こそ、「水縁空間」。水が媒体となり、人と人、環境と人を結びつけるという意味の環境全体を指す造語です。

八幡町は、この「水縁空間」を守り続けてきた、日本では類のない水の都です。



## 水利用の仕組み

水舟を庭先に設け、湧水を利用しているのも八幡町ならではの暮らしの智慧です。水舟とは、竹筒やパイプにあてて引水された湧水を貯留する水槽です。水舟の近くには水神様が置かれていて、自然の恵みに対する人々の感謝の気持ちが偲ばれます。この水舟もカワドと同じく、飲用水↓食べ物の洗い水↓食器洗い、その他、と使う順序が決まっています。利用済みになった水は直接川へ放水せず、魚などが住む鑑賞池に流し込み、排水を川へ還す。一段手前で人の手が加えられる場所を設け、生態系に悪影響を及ぼさないようにしています。



水舟

こうした水の多様な利用方法は、水空間を生かす住環境が整備されているからこそ可能になっています。道、池、畑、川などへ水を順次送り出すことができるように、建物や水路を自然と配置し、極力無駄を排した構成となっています。

八幡町の町並み配置も同様で、谷間の段丘に形成されているため、町全体が水舟のもつ原理を空間的に拡大した環境構成になっています。町中には高低差があり、用水路には落水の好条件が巧みに取り入れられているため、コロコロ、サラサラという水音を発するところが各所にあります。

この水の調べは、人間の五感にも良好な影響を与えるばかりでなく、防火用水としても使用されています。

## 天然水は八幡の特産品

昭和三〇年代まで、この町には赤谷川と大啼谷川の上流の二ヶ所に「水田んぼ」がありました。冷蔵庫のない時代、天然の水は大変貴重

品でした。万延二年（一八六一）の夏は猛暑で重病の床にあった青山藩主の奥方も、古田栄左衛門が天然水を献上したところ、効果てきめんで快方に向かったといわれており、病に伏せた多くの一般町民も天然水で救われたということです。その後、栄左衛門は、この町の湧水が天然水に適していると考え、水田を開発。それ以来、天然水は、八幡町の特産品の一つとなりました。

赤谷川のもものは、夏のアユ出荷のため漁協が専用に使い、大啼谷川のもものは、林業農家の冬の副業として行なわれてきました。

水田工事の際、土中から発見された石像は水神として祀られていましたが、山崩れで流失し行方不明になりました。

その後、上水道工事中に再び発見され、現在、旧役場前の大啼水神堂宇が建立されています。

## 歴史的用水を未来へ

八幡城の麓にある柳町は、袖壁と紅殻格子が似合う美しい景観が残されており、軒先の用水路にはきれいな水がサラサラと流れています。

柳町用水は江戸初期に整備されたもので、その後、昭和三八年の上水道完成まで、飲み水以外のすべての水の供給源として、人々の暮らしのなかで使われてきました。

上水道の完成後、八幡町他の筋にあった用水路はクルマ社会の到来とともに暗渠化され、人々の前から姿を消していききました。しかし、柳町用水だけは蓋をされることもなく、昔の姿をそのまま残してきました。



職人町の歴史的水路

柳町用水の市街地部分の総延長は約五二〇m。五つの部分に区分され、明治の頃からそれぞれの区分ごとに、地域の人々が各戸送りの方法で、毎日清掃を続けています。

この用水を守るための「柳町水組」が組織されたのは、明治時代で、それ以来、水質保全や水量確保、用水路の維持管理などに大きな力を注ぎました。しかしながら、昭和五九年に用水路の老朽化により各所で漏水は著しくなり、柳町自治会では八幡町に対し、水路改修を陳情しました。

これに先立ち八幡町では、総合計画策定のための調査を開始。柳町の人々の理解と協力を得ながら、「町並みに調和した風情ある水景観の整備」と「伝統的な建築様式を残している町並みの保全」を整備事業として取り上げ、昔ながらの良さを生かした町並みの形成をめざしています。

昭和六一年七月には「柳町町並保存会」が第一歩を踏みだし、現在、三つの小委員会が設置されています。

## 《水路委員会》

これまでの生活雑排水は、用水路に直接流していましたが、生活雑排水と町なかを流れる柳町用水は完全に分離し、各戸が浄化マスでろ過してから、新しく埋設する排水管に流すようにしました。フィルター掃除と二万円前後の自己負担については、「私たちの力でもう」と地域の賛成を得て行なわれています。

他にも、景観委員会や建物審査委員会が結成され、城下町の町並み保存に務めています。

## 笑顔が集うポケットパーク

新・八幡町総合計画のキャッチフレーズは「水とおどりと心のふささ」と。その基本構想に基づき、水を生かした魅力あるまちづくりが進められています。

市街地の約二五ヶ所に数珠状に配置されたポケットパークもその一環。町全体を公園とみて、その中心に町の人々や旅人が集い、時には朝市や夜店に、待ち合わせや情報交換などに



やなか水のみち

利用できるポケットパークを設置しました。

昭和五九年から順次、ポケットパークは整備され、七番目に完成した「やなか水のみち」は、平成元年、建設省の人間道路会議大賞、手づくり賞を受賞しています。古くは農業用水であり、その後に生活用水として島谷用水から分水した側溝を、八幡の中央を流れる吉田川に見立てて整備したものです。ここには、約八万個の玉石がさまざまな方法で埋め込まれ、水辺の空間をいっそう情感豊かに演出。周辺には、おもだか家庭芸館や斉藤美術館などのミュージアムが立ち並び、八幡の文化と観光の拠点となっています。

平成六年、建設省の手づくり郷土賞を受賞した「いがわのみち」は、民家に囲まれた用水沿いに続く生活道路です。水路は、いがわと親しむ会の人々によつて自主的に管理され、コイやアマゴ、サツキマスなどが道行く人々の目を惹きつけてくれます。この歩道は、吉田川親水遊歩道へ続いており、先人たちの智慧や昔ながらのルールに守られ、親しまれています。

このように八幡町では、水の都にふさわしく、行政と地域が一体となって水環境を守り続けており、「日本真ん中水と緑の環境文化交流都市圏」の形成をめざし、さまざまなプロジェクトが実施されています。

## ■参考文献

『水緑空間 郡上八幡からのレポート 水の恵みを活かすまち』  
八幡町一九九九年発行  
『郡上八幡の本』  
はる書房一九九二年発行





吉田川堤の桜並木

# 端正な表情を浮かべる城下町は 爛漫の春景色

白い朝もやが山の端に吸い込まれると、満開の桜は美しい姿を川面に映す。赤いランドセルを背負った子どもたちは水路に泳ぐアマゴやコイに歓声を上げ、学校のチャイムに我にかえって、走り出す。城山に棲む、テントウ虫もコウモリも、子どもたちの大切な友だち。そんな豊かな自然が、この町の文化を紡ぎあげたのだろうか。奥美濃の山ふところに抱かれた城下町は、自然の歩みに寄り添うように静かで穏やかな時間が流れていく。

## 美しい季節を迎える小京都

山国の遅い春が、いっせいに咲きはじめました。薄紅色の桜の花びらは吉田川の川面にさざめき、青空に浮かぶ山並みは、うららかな春の陽差しを浴びて、しばしのうたたねをむさぼっているように穏やかです。

奥美濃の小京都、郡上八幡へは、名古屋から東海道北陸自動車道を経由して約一時間二〇分。芽吹きはじめた山の緑は甘い香りを放ち、吉田川の清流は碧をいそう際立たせています。その風景は一枚の肖像画、軒の低い屋根が連なる家並は端正な表情を浮かべて、この町のふところの深さを語りかけてくるようです。いくたびかの合戦をくり抜け、飢饉や災害を耐え忍び、幕末維新には逆賊の汚名に唇をかんだ…。そんな時代の風雪を乗り越えてなお、守り継がれるこの町の伝統は、だからこそ、誇りと自信に満ちあふれているのです。

奥美濃に咲いた文化や伝統は、凜とした気品を漂わせ、美しい季節を迎えています。

## 和歌で結ばれた中世の歌人たち

日本国中が戦乱の火の手に落ちた、応仁の乱。野武士は夜叉と化し、田畑を焼かれた民は、村を捨て、そんな地獄のような時代、歌道の伝授も失っていくなかで、筆を捨てることなく、和歌に心を託した武将がいました。時の郡上城主、東常縁がその人です。東一族は源頼朝以来の名門で、藤原定家を祖とする二条派の武家歌人として知られていました。歌道の誉れ高い歌人は、同時に戦の名手。東氏が「大和町に築いた篠脇城は堅固な要塞で、二白の目堀」と呼ばれる構えは難攻不落の山城でした。

そんな東常縁に不幸が襲ったのは、応仁の乱に際し、東国へ出陣していた時のこと。美濃の守護代土岐妙椿は、郡上へ侵入し、篠脇城を攻めました。この時、城を守っていたのが常縁の兄、氏数。城はあえなく落城し、氏数は気良へ落ちのびました。

あるがうちにかる世をしも見たりけり  
人の昔のなおも恋しき



愛宕公園

悲嘆にくれた常縁の心情をつづった一首です。この歌を知った妙椿は、

「常縁とは昔から和歌の友、篠脇城はさぞ残念なことだろう。私も和歌を大切にしているから、これ以上のことをするつもりはない。常縁がもし私に和歌を送ってくれたなら、領地はお返ししよう」

常縁は、すぐに「〇首を詠んで妙椿のもとに送りました」。

常縁の和歌に心を打たれた妙椿は、今の気持ちが変わらなければ、領地を返そうという返歌を送っています。

言の葉に君が心はみずきき  
行末とあらば跡は違わじ

和歌に取り持つ和議は、こうして結ばれました。

連歌の宗匠、飯尾宗祇が山深い郡上の地を訪れたのは、常縁から古今和歌集の秘事を伝授してもらったためでした。古今和歌集の二〇巻の講釈や秘事口伝など、常縁の奥義は文明三年（一四七二）から約三年間にわたって行なわれ、この常縁以来、古今伝授に関する関

心が高まりました。  
小駄良川のほとり、宮ヶ瀬橋の近くにこんなと昔から湧き出る泉、宗祇水は、文明年間、この泉のほとりに宗祇が草庵を結んだところ。古今伝授を終え、帰路につく宗祇を常縁が見送ったのも、宗祇水のほとりでした。  
昭和六〇年には、全国名水百選の一番手として環境庁の指定を受け、名実ともに「水の生まれる町、郡上八幡の名勝となりました」。

## 歴史を見守る八幡城

標高三五四m、城山の頂に堂々とした体躯をみせる郡上八幡城は、東常縁との決戦のため、遠藤盛数が築いた城です。市街地からはわずか一〇〇mほど高いところに建つ城ですが、その天守閣からは、民家のかまどの煙さえ見下ろせるほどの眺望。名門東氏を滅亡させ、幾多の合戦を制して郡上藩主になった遠藤一族は、城下町の暮らしを見下ろしながら郡上の再建を練りあげたのでしょう。

城山のふもとで端正な表情をみせる古い町並みは、柳町、職人町、鍛冶屋町、遠藤氏の構想により生まれたこれらのたたずまいは、今なお変わることなく、受継がれています。

こうした歴史の営みを展示しているのが八幡城の資料館。慶長五年（一六〇〇）、遠藤慶隆と稲葉貞道の壮絶な戦いを描いた「郡上八幡絵図」や関ヶ原の合戦の武勲により徳川家康から拝した「三代城主青山家に伝わる」金の髯標をはじめ、合戦の日々や城主の暮らしをしるばせる多くの文化財が所蔵されています。



春の八幡城



## 八・幡・町・の・歳・時・記

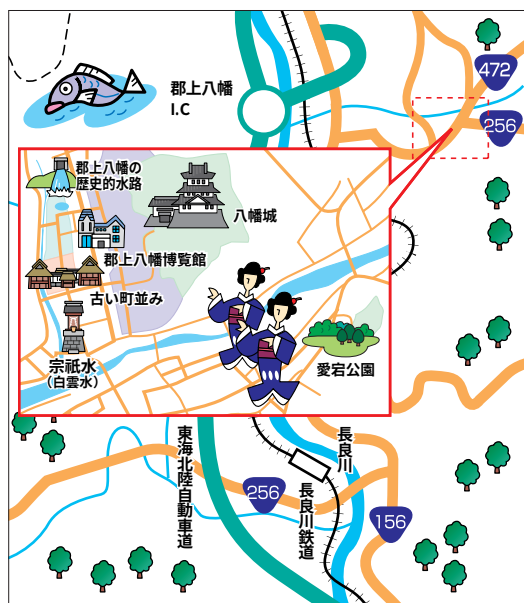
### ◆春まつり4月中・下旬◆

吉田川の川面に爛漫の桜が映えるころ、郡上八幡春祭が開催されます。五町堤・愛宕公園、堀越峠は桜の名所。柔らかな春色に染まります。祭最大の呼び物は、岸剣神社、日吉神社の大神楽（いずれも県無形民俗文化財）と小野八幡神社の大神楽。子ども神輿や花神輿など約四〇基が町中を練り歩き、多くの人々を魅了します。



## 八幡町 EVENT INFORMATION

|               |           |
|---------------|-----------|
| ■郡上八幡春まつり     | 4月下旬      |
| ■鮎釣り解禁        | 6月中旬      |
| ■郡上おどり発祥祭     | 7月上旬      |
| ■ヤナ場解禁        | 8月上旬      |
| ■毛付市          | 7月下旬      |
| ■徹夜踊り         | 8月13日～16日 |
| ■宗祇水神祭        | 8月下旬      |
| ■口明方大神楽・高雄歌舞伎 | 10月上旬     |
| ■郡上八幡ふるさとまつり  | 11月中旬     |
| ■郡上本染寒ざらし     | 1月中旬      |
| ■溪流釣り解禁       | 2月上旬      |



### ●交通のご案内●

- ◆名古屋方面からお車をご利用の方  
名古屋 東名・名神高速道路 一宮JCT 東海北陸自動車道 郡上八幡IC
- ◆公共交通機関をご利用の方  
名古屋 JR東海道線 (約30分) 岐阜 JR高山本線 (約30分) 美濃太田 JR高山線 (約90分) 郡上八幡
- ◆高山方面からお車をご利用の方  
飛騨高山 R472 (せせらぎ街道) (約80分) 郡上八幡
- お問い合わせ●  
◆八幡町役場商工観光課 TEL0575-67-1819 岐阜県郡上八幡町  
◆郡上八幡観光協会 TEL0575-67-0002 FAX0575-67-1771 http://gujo.com/hachiman/

## 気ままにJOURNEY

### 郡上の平和を願う、神社や仏閣

歌道の東氏が八幡の文化の生みの親なら、遠藤氏は、城下町の育ての親。用水や町の整備はもちろんのこと、要所に寺を建立しています。六代遠藤常友によるこうした構想は「八家九宗」を理想としたもの。多くの文人たちが俳句を 즐んだという揚柳寺、二代藩主遠藤慶隆ゆかりの大乗寺、遠藤氏・金森氏ゆかりの慈恩寺など、由緒ある神社・仏閣が辻のつきあたりに配されています。

なかでも慈恩寺は慶長二年（一六〇六）、八幡城主遠藤慶隆開基の由緒あるお寺。境内には遠藤氏や金森氏の各霊廟も建立されており、禅堂（修業道場）も開かれていました。しかし残念なことに、明治二六年の大水害で裏山が崩壊し、山門・勅使門を残してすべて埋没。三年後には復興されて現代にいたっています。

奥庭の「て」草園は半山禪師が創建し作庭したもので、雄大な岩山を背景に、池の周囲には紅葉を配し、絶えず響き渡る滝の音が、幽玄で豪壮な雰囲気を出しています。この庭は池泉廻遊式の室町様式の庭園です。初

夏の新緑、秋の紅葉、冬の雪景色と、移りゆく季節の彩が趣をいっそう深めています。

### 町並みに調和するレトロ建築

八幡城築城から四百余年。歴史的な町並みを大切に保存する八幡町では、大正時代や昭和初期に生まれたレトロ建築などが、取り壊されることなく、しっかりと根を下ろしています。

郡上八幡博物館は、大正時代の税務署をリフォームしたミュージアムです。「水とおどりの城下町」郡上八幡の魅力が「水」「わざ」「おどり」の各コーナーにゆつたりとわかりやすく展示されています。藍染め四二〇年の伝統をもつ郡上本染めや豊かな自然と人の手から生まれた郡上紬など、全国的にも高い評価を受ける作品の数々は、繊細でありながら雅、和歌を愛した東氏の心が、達人の熟練の技で現代に艶



郡上八幡旧庁舎記念館

やかな華を咲かせているようです。他にも郡上おどりのマルチスライドなど、見どころは盛沢山。長い年月のなかで熟成された八幡の伝統や文化の深さを感じることが出来ます。レトロ建築を利用した施設は、昭和初期の木造の紡績工場を改造したブルワリー「愛水舎」、旧八幡庁舎を利用した「郡上八幡旧庁舎記念館」などがあり、風情豊かな奥美濃の都にしつくりと溶け込んでいます。

### 豊かな自然がアートの原点

やなかの水のこみち周辺は、三つの私設美術館が建ち並ぶ八幡の文化と観光の拠点です。民具民芸を展示するおもたか民芸館、先祖代々が蒐集してきた秘蔵の茶道具などを展示する斎藤美術館など、どの美術館も個性派ぞろいです。

民話・童話の挿絵画家として、また折り紙・切り絵の創作活動で有名な水野政雄氏が主宰する遊童館は、アートギャラリー。郡上おどりや大名行列を題材とした紙人形、八幡の山々で拾い集めた木片を素材にした木ぼくり、まげる折る、切る、無表情だった一枚の紙に生命を吹き込む切り絵、折り紙の世界。そのモチ

フは、八幡町の豊かな自然です。城山で拾った檜の木の落ち葉にハサミを入れれば、フクロウやミミズクに、ティーブルに並べられた折り紙はシャクトリ虫やテントウムシに。横に歩くカニや、逆さにぶらさがったゴウモリ、親子バツなど、あぐらとした丸みのある手の中から新しい作品が次から次へと生み出されています。その鮮やかな手さばきは「切り絵博士」という異名をもつほど。子どもばかりでなく、大人まであつという間に水野氏の世界に引き込まれていきます。まるで、泉のようにこんこんと湧き出す水野氏のイメージは、毎日、愛犬を連れて散歩する城山や吉田川。草は語らい、風は歌う。自然や子どもの世界への深い愛着に基づいた創作活動は、まさに美しい郡上八幡の自然が生んだナチュラルアート。人間が自然体で呼吸できるやさしさと自由な空気に満ちあふれています。



切り絵をする水野政雄氏

# 特集 金廻四間門樋 シリーズ

第一編

## 損斐川左岸堤防で発見された産業遺跡

歴史ドキュメント

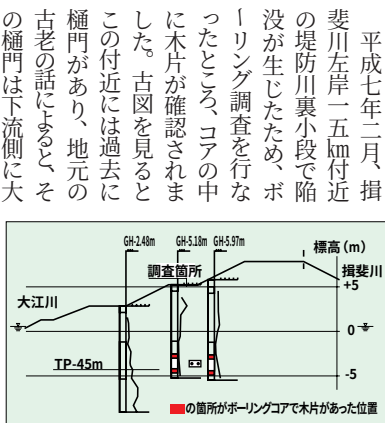


樋門は、輪中地帯に多く築造された排水管。周囲を堤防に囲まれた輪中の排水を、堤防外の河川へ排出する機能を有していました。しかし、耕地整理や河川改修などで徐々に姿を変えていきました。今回、発見された金廻四間門樋もその一つ。近世の土木技術を知る上で、貴重な発見といえましょう。



昭和10年(1935)の大江川河口付近(木曾川下流事務所)

### 近世土木技術を知る貴重な遺跡



(図1)ボーリング調査による金廻四間門樋の位置

(一)堤防本体による圧密沈下の二つが考えられます。この樋門は、幅約四間(約七m)、長さ約一八間(約三二m)の巨大な木造樋門でした。そこで、その廃棄の方針を變更、慎重に発掘調査の上、復元、保存することになりました。樋門は当初、金廻樋門と呼んでいましたが、各分野の専門家による懇談会で、「金廻四間門樋」と名称が確定しました。

### 門樋建造の背景と建造時期

金廻四間門樋があった地点は、六一一〇haに及ぶ広大な高須輪中の基幹排水路、大江川の河口部にあたります。江戸時代、高須輪中の悪水路(排水は大江川、新江川を経由して損斐川河口に合流し、樋を経て損斐川に排水されていました。万寿新田付近には、高須輪中の悪水が集中し、多数の杓樋が設置されており、金廻四間門樋もそのうちのひとつでした。

江戸末期になると、土砂の堆積などで排水がむづかしくなり、大江川悪水路を下流側に江下げして排水改良を行なったことが古文書で知ることができます。どこまで江下げしたのかは明確ではありませんが、万寿新田地先か

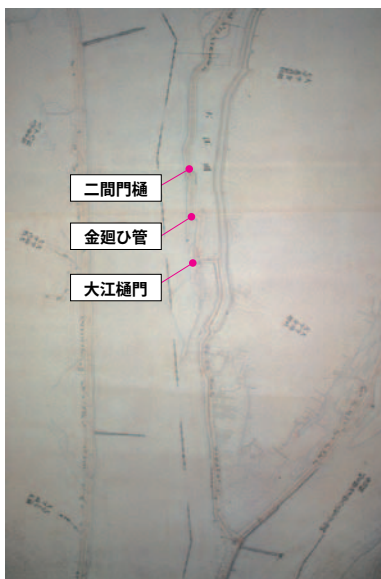
ら門樋が発見された付近の金廻地先まで江下げしたのではないかと推察されます。

金廻四間門樋に使用されている木材について、年輪年代測定の結果から、この門樋の建造年代は万延元年(一八六〇)〜明治二五年(一八九二)の間と推定されます。一方、明治二二年頃の金廻村絵図10頁参照によると、門樋の存在が認められます。また、大正二二年(一九二二)、損斐川平面図(木曾川文庫蔵)でも認められますが、昭和一〇年(一九三五)の平面図では、新堤防が築造され、大江樋門のみとなっていることから、門樋が埋められた時期は古老の話と整合します。

しかし建造年代については、村絵図からも明治二一年前のものと思われませんが、確定するにはいたってません。

### 技術上の特徴

金廻四間門樋の技術上の特徴として次の二つを挙げることができます。



大正11年(1922)の大江川河口付近(木曾川文庫蔵)

(一)すべて木造である。

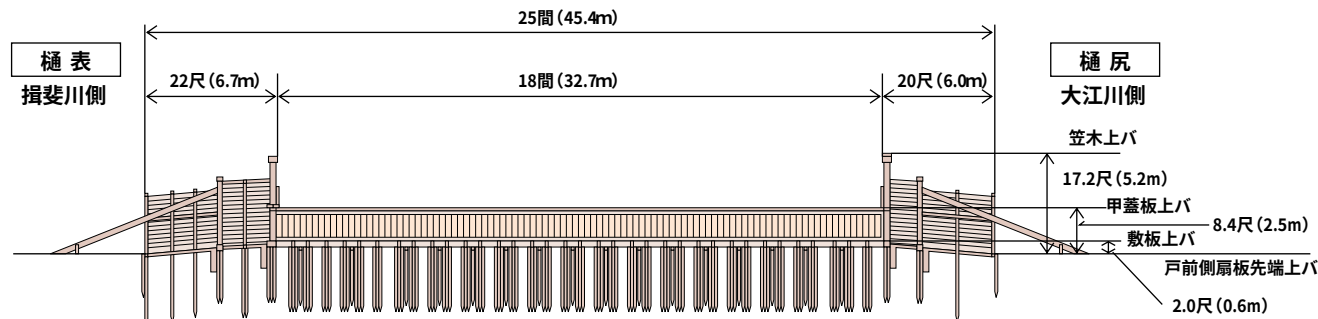
ヒノキを主とし、一部、ケヤキやツガを使用。土台と敷板は、杭にはスギを使っています。木組みは、社寺建築と同様、江戸時代の木造建築の粋を集めて作られています。一部に、部材の連結のための鉄製カスガイ・釘が用いられています。

(二)入念な基礎工が行なわれている。

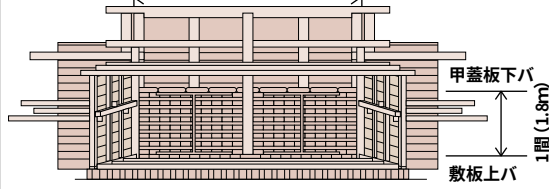
基礎工として、木材の土台が格子に組まれ、その上に本体が載っています。土台の下には太い敷丸太が敷設され、ともに、格子の交点には五本の杭が打ち込まれています。また、土



金廻四間門樋 樋表側立面図



金廻四間門樋 断面図



金廻四間門樋 断面図

台が移動しないよう、敷丸太を留める留杭が適宜 打ち込まれています。

さらに、門樋の最先端には、杭と木矢板が打ち込まれています。45 cm角の枕土台の下には隙間なく杭が打ち込まれていますが、これは遮水効果を狙ったものでしょう。

これら杭(地杭)は長さ約3 m・直径15 cmで、総計三八〇〇本あまりと推計されています。これらに加え、

- ・金属材料が使われていること
- ・タタキ土を使用していること
- ・観音開戸を使用していること

などが大きな特徴といえます。

◆江戸時代の土木工法◆

江戸時代の杵樋の土木工法には、関東流、紀州流、上方流、濃州流の四つのタイプがありました。上方流はほぼ関東流に等しく、濃州流はその中間の工法でした。

関東流が、水流に平行して敷板を張り、その押木を各柱間に取りつけているのに対し、紀州流は次の長所をもっています。

(一) 敷板を横張りとし、その両面を側板で抑えるので、押木が不要になることも、敷板に生じる上向きの圧力は側板にかかる重量で抑えるので、安全です。

(二) 甲蓋板は桁木に釘付けするので、甲蓋抑木は不要となります。

土木工要録(内務省土木局、明治一四年三月)に掲載されている紀州流杵樋の図を見ると、基本構造は同じであることから、金廻四間門樋は、紀州流の系統と考えられますが、規模が大きいこと、紀州



門樋正写之図

この「門樋正写之図」をみると、金廻四間門樋は、福東四間門樋と同じ基準に従って建造されたものといえます。福東四間門樋は、明治三三年の大樽川の改修に伴って不要となって、

金廻四間門樋とはほぼ同じ構造の門樋が、これより約一・三 km 北の輪之内町海松新田にありました。明治一三年に竣工した福東四間門樋がそれです。

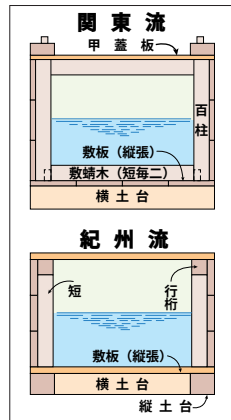
福東四間門樋は、明治時代に木曾三川の治水に尽力した片野萬右衛門の設計・施工監督によるもの。輪之内町の資料や古老の話から、明治一二年に工事は開始され、翌年に完成したと考えられます。

片野萬右衛門の実家である片野資料館には、萬右衛門の設計図「門樋正写之図」が所蔵されています。この設計図は非常に正確な図面であり、萬右衛門が樋門建造に関する高度な技術を有していたことを示しています。

同じ構造の福東四間門樋

流では、排水口には落戸が用いられているのに対し、観音開戸となっていることが違います。

また、土木要録の「逆水留門樋の図」には、金廻四間門樋同様に、幅四間、樋表には観音開戸が設置されていますが、この図の建造年代が江戸時代か明治初期のものかは不明です。いずれにしても金廻四間門樋は土木産業遺跡として貴重なものといえます。



明治以前 日本土木史(社)土木学会1936.6.25より



門樋の内部



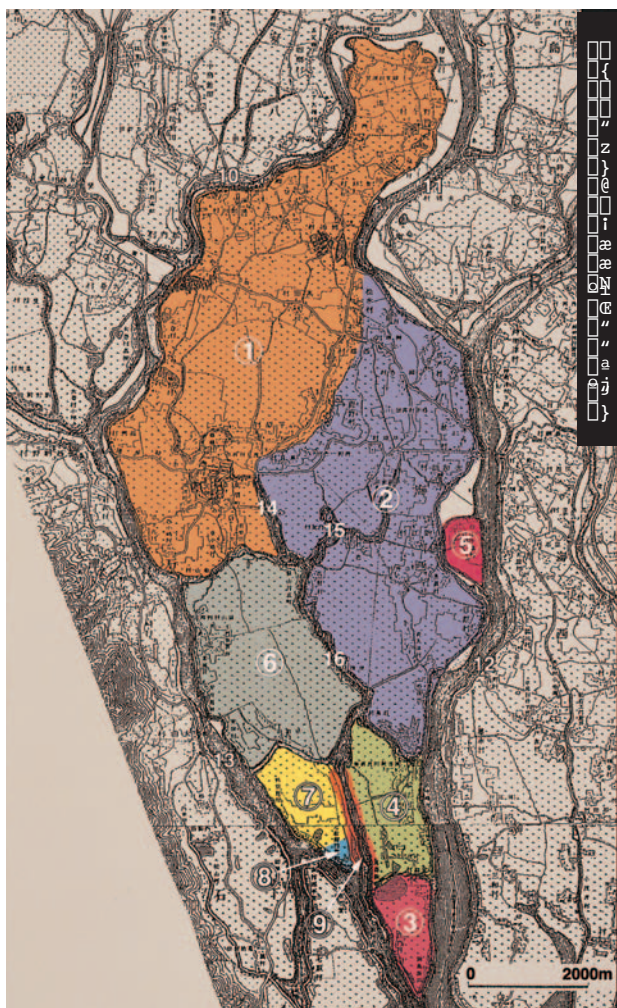
揖斐川側に取付けられている観音開戸

埋められました。この門樋が設置されていた場所は、現在は四間門樋橋が架けられています。

■参考文献  
『平成八年度産業遺産調査金廻ひ管調査報告書』  
建設省木曾川下流工事事務所



# 高須輪中の成立から 金廻四間門樋築造まで



高須輪中内小輪中分布図

①古高須輪中 ②秋江(日原)輪中 ③金廻輪中 ④福江輪中 ⑤松山中嶋輪中  
⑥本阿弥輪中 ⑦帆引新田輪中 ⑧七右衛門新田 ⑨万寿新田  
10 大樽川 11 長良川 12 木曾川 13 揖斐川 14 西大江川 15 東大江川 16 大江川

## 高須輪中の形成

現在の高須輪中は、幾つかの小輪中を連続する堤防で囲い込んだ複合輪中です。

この地域は、比較的土壌の高い北東部から開発が進められました。天保十一年(一八四〇)に洞庭が写したとされる百輪中旧記には、元応元年(一三一九)に古高須輪中が、建武二年(一三三五)に秋江輪中がそれぞれ成立したと記されています。しかし、これには異説がたてられ、現在では古高須輪中や秋江輪中の成立は木曾川の流れ

を大きく変えた天正一四年(一五八六)の大洪水以後という説が有力になっています。

木曾川下流で土砂が堆積しやすかった地域に金廻輪中が開発されたのは天正一四年です。続いて福江輪中が慶長二年(一五九七)に、松山中嶋輪中が正保三年(一六四六)に成立し、これで現高須輪中の北東部の開発が終わったことになりました。

現高須輪中の中央から西南部の開発はこれより遅れて慶安二年(一六四九)に本阿弥輪中が、その南に帆引新田輪中が承応元年(一六五〇)にそれぞれ成立しました。さ

## 低地の悩み

かくてこの隣接する小輪中を北は大樽川、西は揖斐川、東は長良川と木曾川の連続する堤防で囲い込むこととなり、現在の高須輪中の原型が成立しました。

新田の開発は一六〇〇年前後から盛んに行われましたが、海拔ゼロメートルに近い低地で湛水被害が多く、排水に苦しみました。

本阿弥新田は、京都の豪商佐野紹益等々に



海津町歴史民俗資料館特別指導員

原田 昭二 氏

1927年生

公立小中学校長から海津町教育長を経て、現海津町歴史民俗資料館特別指導員。

「基本日本語の表記」編集委員長、「海津町史 通史篇」共編著、「伸びゆく輪中」編集委員長、「高須輪中土地改良誌」監修。

らにその南に七右衛門新田が明暦三年(一六五七)に開発されて帆引新田輪中に組み込まれました。その南にあたる万寿新田は、大江川や中江川その他の高須輪中の排水幹線の集まるところで開発が遅れ、多くの排水樋門を伏せ込んで囲い込みに成功したのは享保一七年(一七三二)のことでした。

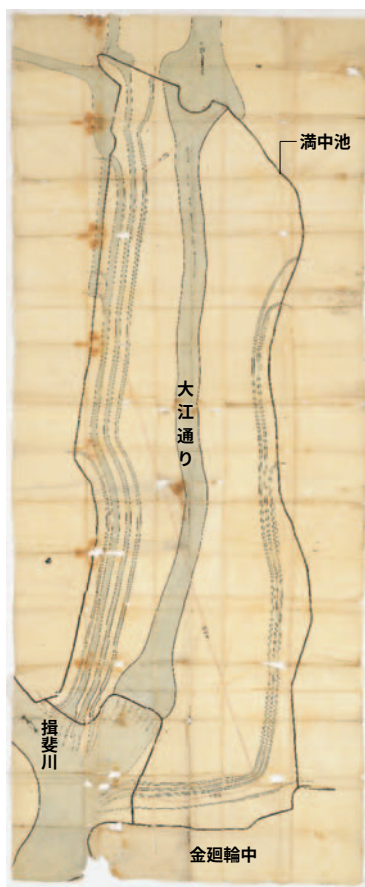
よって開発されましたが、紹益はそのころ屢々この地を訪れたらしく、当時のようすを「美濃之記」に書き遺しています。「美濃国石津の郡高須といふ所に一城の主まします。そのしろしめすさとさとあまた侍る中に塩みちくへきかたも遠からねハ鶴鳴きわたる芦べあり。其芦原をうけ給りてあらたに国となし里にするよしして年ことにかりにるにけり」

慶安二年(一六四九)に本阿弥新田の開発に成功しましたが、翌年に大洪水があつたため、検地は明暦二年(一六五六)に行われました。一八三町歩余、石盛は反一石です。しかしその後打ち続く洪水、大地震による地盤沈下、排水不良のため、田は常時一尺ないし一尺五寸の深溜まりになるという湛水被害に苦しみました。開発から一〇〇年後には上納米が年二、三石という窮状に陥つたのです。湛水から稲を守ろうとして堀田の造成が始まったのも、この頃からでした。

## 万寿新田の開発

万寿新田の地域は高須輪中の西南部でとりわけ土地が低く、揖斐川の古い入り江で





満中池開発絵図(上部が1722年ごろのようす)  
海津町歴史民俗資料館蔵

このようにして排水に苦労してきましたが、排水先の損斐川に再び土砂が堆積するようになりまし。とりわけ天保六年(一八三五)には大江通りの杵樋三門が吹き抜け五門の堤腹が切れるという事故があり、これは工事の手抜きではないかということまで打ち壊しなどの騒ぎが起きました。これを万寿騒動と言います。

## 大江川の江下げ

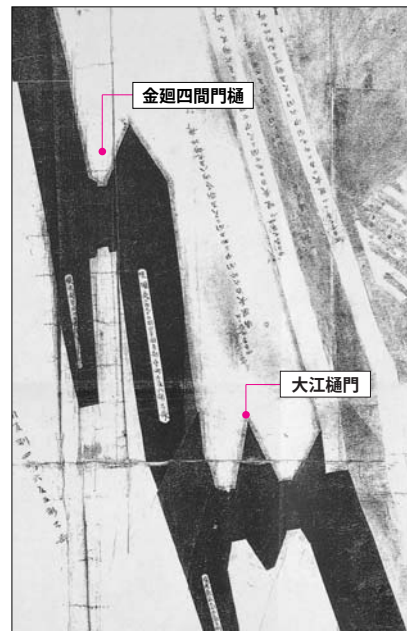
しかし、満中池は排水路から流れ込む土砂の堆積が進み、何度も池の江浚えをしましたが効果はありませんでした。そのため笠松郡代は満中池を埋め立てて新田を造り、江筋を立てて大江通りや各排水路を損斐川通りにまで導き、ここに杵合計一八艘を伏せ込んで排水を計りました。この工事に一〇年を費やし、完成したのは享保一七年(一七三二)でした。かくて高須輪中の殆どの悪水は、万寿新田地先で損斐川に排水されることになりました。

あった満中池の一带にあたります。この池には大江通り(古木曾川の跡で、高須輪中高位部や輪中東部の悪水排水路となっている)や、中江通り(主として本阿弥輪中の悪水排水路、新江通り(主として帆引新田輪中の悪水排水路、そのほかの排水路が集中していました。享保七年(一七三二)、満中池に流れ込むそれぞれの排水路に杵を伏せ込み、万寿新田を開発しました。

これを機に、排水量の最も多い大江川を現在地より更に南の金廻地区(当時は伊勢国に属していたが、明治一六年水利を同じくするという理由で岐阜県に編入)に江下げをするようになりました。

当時大江通りには七艘の杵樋が伏せ込んでありまし。長さはいづれも一六間、幅は八尺が三艘、九尺が三艘、一丈二尺が一艘で、高さが四尺五寸が三艘、五尺が二艘、四尺五寸が一艘、六尺が一艘です。幅一丈二尺のものは高さが六尺であり、これは排水のほか、輪中内部と損斐川との舟運を図ったものと思われまし。幅を合計すると六三三つまり一〇間余になります。

これを金廻村からその南に隣接する江内村のあたりまで、排水路を導くという江下げをしたわけまし。工事の詳細はわかりましせんが、弘化四年(一八四七)の「万寿新田杵樋江下ヶ御普請箇所分弁金取調帳(海津町史)によれば「金廻村江内村地内大江通堀割除築立丁場弁金」「金廻村杵並猿尾仕立其外石杭打諸色一切弁金」「大樋並外河堤築立丁場弁金」の文字が見えまし。これによれば大江川の江下げのための堀割を作り、



金廻村字絵図(1887年ごろ)  
海津町歴史民俗資料館蔵より河川環境管理財団名古屋事務所作成

金廻に杵と猿尾を築き、さらにそこから損斐川に堤防を築いて大樋を設置したものと思われまし。万寿新田では大江川の排水には合計六三三幅の杵が必要だったのですから、金廻村にも杵と大樋を合わせてそれだけの排水能力のあるものが造られたと考えられます。

## 金廻樋門

昭和二年(一九三二)に岐阜県耕地協会の発行した「岐阜県耕地事業沿革史」に「明治一七年(一八八四)大江村大字金廻地内二木造樋管ヲ設置シ、復明治二四年二至リ内務省ハ直営ヲ以テ大江村金廻地内二別二木造樋管ヲ設置シ」と記述されていま。木造樋管の耐用年数はおよそ五〇年と言われいま。この木造樋管と木造開門は前述の金廻村杵と大樋を改修したものではないかと推定されまし。明治二〇年(一八八七)ごろの作図と思われる金廻村字絵図にも、木造樋管と開門の位置が明示されていま。

大樋という言葉は現在も用いられ、それは改造を重ねて現在も機能していま。今回発掘された金廻四間門樋は、明治一七年に築造された木造樋管ではないかと思われまし、資料に乏しく推定の域を出ないのが残念です。

## VOICE GALLERY

### アンケートのお願い

河川整備に関するアンケート調査を実施していま。ご協力が頂ける方にはアンケート用紙をお送りします。左記にご連絡下さい。

■建設省木曾川下流工事事務所  
TEL 0594・245715 調査課  
FAX 0594・2110893

VOICE 今井守様  
中津川市

八幡町特集 楽しみにしていま。そこで提案なのですが、読者に特集する市町村について学びたいことを、事前に求めることはできないのでしょうか。

A 本誌は、特集市町村の歴史・文化や治水事業などを編集していま。特集市町村のこれらの内容について、知りたいことがございましたら、お寄せ下さい。

編集後記のコーナーに、次号の特集市町村を予告していま。参考にして下さい。

■お問い合わせは「KISSO」編集  
連絡先 FAX 0525・57118627



# 民話の小箱

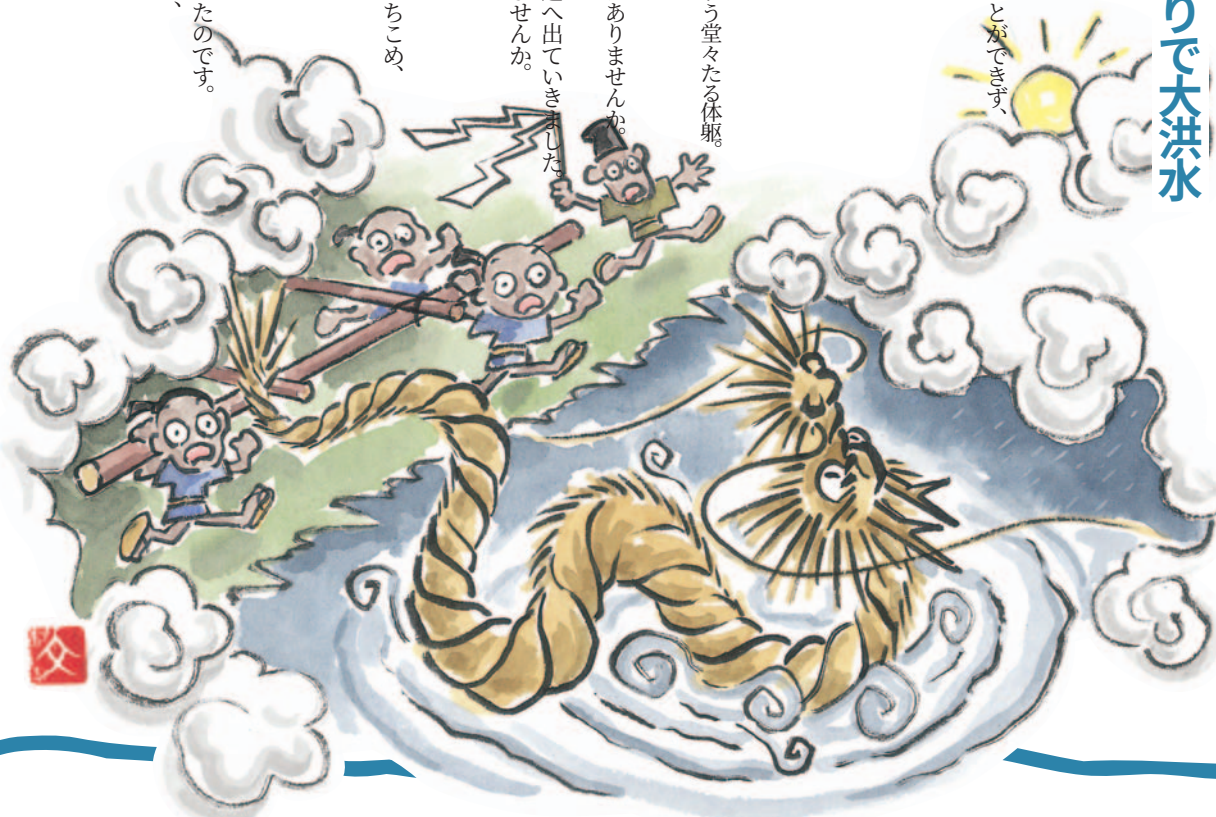
## 竜の怒りで大洪水

長い日照りが続いたある年の夏のことで、  
長良川の段々畑を二段も三段も登ったところに  
五町、今の八幡町五町はありました。  
眼下に川を見下ろしながらも、五町では川の水を引くことができず、  
作物を作るのは、観音山から流れる谷水と、雨のみ。  
その頼みの水も、長い日照りで枯れてしまい、  
飲み水さえも事欠くありさまでした。  
困り果てた村人が話し合っている庄屋さんが、  
「竜は雨を呼ぶといふことじゃ。」  
「そうじゃ。そうしまいか。それはええ考えじゃ」  
村人はこういって、早速、竜を作り始めました。

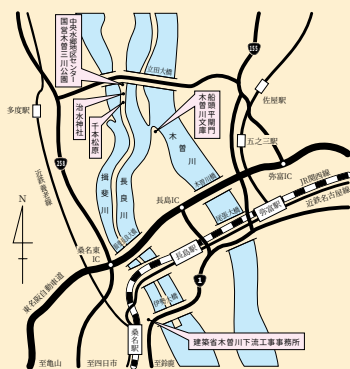
まる一日がかりで仕上げた竜は、長さ五m、胴回り一mという堂々たる体躯。  
それを丸く輪にして、諏訪神社の拝殿へ奉納しました。  
次の朝、お神酒を三升背負って諏訪神社へ行くと、  
輪にしていた竜は首を拝殿に向け、突っ立っているではありませんか。  
驚いた村人は、お神酒を竜の口に流し込み、  
雨乞いの式をそそぐと終えると、竜をかついで村の道へ出ていき、  
すると竜は突然暴れだし、大矢淵に飛び込むではありませんか。  
それを見て腰を抜かした村人の一人が、  
「雲じゃー雨がいたただけるぞ」  
と叫びました。

あれほどぎらついていた太陽を覆い隠すように黒雲がたちこめ、  
カメをひっくり返したような大雨が降ってきたのです。  
「雨じゃあ、雨じゃあ、ありがたや」  
しかし、どうでしょう。  
雨はやむことなく、雨足はますます激しくなるばかり。  
「大水じゃあ。村が流されるぞ」

夜が明けるころにはついに、村は大水につかってしまったのです。  
それで村人は「竜に汚れを入れたかもしれん」といって、  
汚れを払いに諏訪神社を再び訪れました。  
すると、どうでしょう。  
祝詞が終わるころには、雨はこやみになり、  
竜が跳ね上がって雲に乗り移るのが見えました。  
それから、五町の空は晴れ上がり、  
大水でつかった段々畑は広い平地に変わって、  
大根の名所になったということです。



## 木曽川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分  
《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始  
《入館料》無料  
《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分  
名神羽島ICから車で約30分  
東名阪長島ICから車で約10分  
《お問い合わせ》  
船頭平閘門管理所・  
木曽川文庫  
〒496-0947 愛知県  
海部郡立田村福原  
TEL(0567)24-6233



## 編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近で起こった出来事、地域の情報などをお知らせください。

例年、冬になると木曽長良背割堤に飛来するコハクチョウの姿を今年はみかけませんでした。今年だけのことでしょうか、気になるところです。

宛先 「KISSO」編集 FAX.(052)571-8627

今号の編集にあたって、八幡町のみなさん並びに原田昭二氏に大変お世話になりました。お礼申し上げます。次回は、南木曽町を特集します。

木曽川文庫ホームページ  
<http://www.kisogawa-bunko.cb.moc.go.jp>

●表紙写真●  
上：春の長良川  
中：宗祇水（白雲水）  
下左：吉田川親水遊歩道 下右：安養寺水舟

『KISSO』Vol.34 平成12年3月発行

発行：建設省中部地方建設局木曽川下流工事事務所 〒511-0862三重県桑名市播磨81 TEL (0594) 24-5715

木曽川下流工事事務所ホームページ URL <http://www.cb.moc.go.jp/kisokaryu>

制作：財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号（東海ビル） TEL (052) 565-1976